

端野の寺院と教会・神社(その1)

開拓と宗教

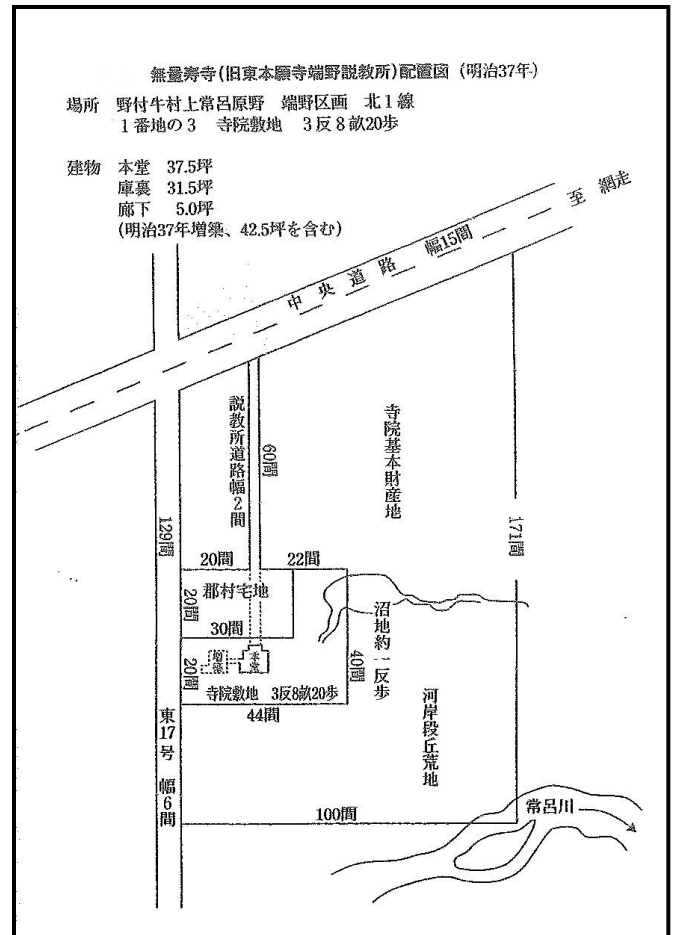
開拓地への移住者にとって、心の拠りどころは、神仏への信仰でした。

北海道開拓使も、宗教が北海道開拓の大きな推進力となるものとして、本願寺派の北海道進出を積極的に支持していました。

また、北海道の開拓に大きな役割を担った屯田兵の精神的支えとなった「屯田及び家族教令」においても「毎月指定の日には説教所に至り法話を聴聞して益々徳義心を養い兼ては全村老幼談し会ひて親睦を図るべし」とあり、神仏への信仰を強調しています。

真宗大谷派説教所の開設

端野にあつては、屯田歩兵第四大隊本部が根室から野付牛の移転に先立つ明治二九(一八九六)年九月、真宗大谷



出典：新端野町史(端野町)

派東本願寺が、中央道路端野二号駅通(現在の国道三九号東一七号線付近)前(常呂川沿い)に仏堂を建て九月二七日に端野説教所を開設しました。

この仏堂は、五間、四間の高棟で請負は屯田兵の兵屋や中隊本部の建物を請け負った中西関次郎氏であると、無量寿寺沿革史に記されており、この説教所が、現在の無量寿寺の前身です。

また、説教所には、根室で布教にあつた安居院源信師(本名 福島大信、岐阜県出身)が本尊を奉持し、

着任しました。この説教所には、明治三〇(一八九七)年と翌三一年に入地した屯田兵が、網走から野付牛、相内に向かう際、この説教所で一泊し、疲れを癒し入植地に向かいました。

また、同年六月一五日、野付牛村外一カ村戸長役場が短期間でしたが置かれました。

さらに、翌三一年一月に端野尋常小学校が開校されるまでの一年余り、この説教所で寺子屋式の教育も行われました。

無量寿寺の創設

屯田兵二〇〇人とその家族の入地、牧場の開設や個人開拓入植者の増加に伴い年々檀家が増えてきた明治三五（一九〇二）年一月二日、浄土真宗大谷派「超倫山無量寿寺」の公称が付与され、寺院として創設されました。また、同三七（一九〇四）年には、本堂の増設と庫裡を建設し確固たる地歩を築きました。

無量寿寺の移転

大正元（一九一二年）、野付牛から網走までの鉄道が開通すると端野駅付近が急速に市街化しました。

その頃、無量寿寺の建物の老朽化が目立ち始め、大正一三（一九二四）年四月、第四代目の住職として赴任された渡辺春成師は、檀家の方々と寺院の移転新築を協議され、二区簗口豊吉氏から寺院用地として約6・6アールの土地が寄進されたのを機とし、檀家の方々の浄財により、新しい寺院を建設し、大正一四（一九二五）年一月五日遷座法要を営みました。

この時、住職の渡辺春成師は、新しい寺院の山号を「智慧光山」と名付けました。



出典：開教百年誌（無量寿寺開教百年誌編集委員会）

お寺の開放

無量寿寺は布教に積極的に取り組むとともに、仏教青年会、仏教壮年会、仏教婦人会等を組織し、門徒の結束を図り、地域に開放した諸活動にも取り組みました。

昭和一〇（一九三五）年頃から学校の春休み期間中寺院を解放し、地域のしょうしんげ子供たちを対象に、住職から「正信偈」を習ったり「法話」を聞く「日曜学校」を開設し、この日曜学校は戦後の昭和二三年ごろまで継続されました。

また、青少年団体や婦人会、時には部落集会や柔剣道大会等も行い地域との深い関わりを持ち親しまれてきました。さらに、昭和三一（一九五六）年には「若葉保育園」を開設し、昭和四七（一九七二）年からは「若葉幼稚園」として、端野町の幼児教育に大きな役割を担っていただきました。

なお、歴代の住職は、開基住職 福島大信師、二代目 木島浄義師、三代目 福島彰信師、四代目 渡辺春成師、五代目 渡辺専照師、六代目 渡辺照道師です。